

主題	地域と偕に生きる～「利用者のストレングスを引き出す様々な地域交流」		
副題	～自主性引き出す！ 地域にまず一歩～		
地域交流		ストレングス	
研究期間	12ヶ月	事業所	養護老人ホーム 偕生園
発表者：松本 真澄（まつもと ますみ）		アドバイザー：	
共同研究者：吉沢 和人			
電 話	042-541-1236	メール	kaiseien-soudanin@doho-gojoyokai.com
FAX	042-545-5315	URL	http://doho-gojoyokai.com/2kaisenen.html

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人同胞互助会を母体とする養護老人ホーム偕生園は、昭和34年3月に定員50名の施設として開設し、平成12年に全面建て替えをした。特別養護老人ホーム、在宅サービスセンター、ヘルパーステーション、地域包括支援センターなどが同敷地にある。現在定員140名である。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

利用者自身が地域住民の一員である認識が薄く、地域から見ても高齢者施設があるという事だけで、地域の風紀を乱す得体の知れない施設、無関係な異空間としてとらえられていた。

法人の目標である「地域に開かれた福祉拠点」として、地域の方々や学校をボランティアとして受け入れるなどしてきたが、利用者一人一人が地域住民としての自覚を持って地域と関わっているとは言いがたい。その理由として

- ボランティアの受け入れは、施設行事やクラブ活動などが中心で、利用者が地域に出る事と結びついていなかった。また自発的に行動を起こせない利用者は、施設内に閉じこもりがちであった。
- やる事もなく時間を持て余す利用者も多く、昼間、公共の場で飲酒し、市役所から苦情もあった。
- 近所のゲートボール場で利用者がゲートボールを楽しんでいたが、地域住民よりうるさいと苦情を言われ、施設への理解不足が伺えた。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

＜目 標＞ 利用者が自主的に地域に出て、利用者の持つ力（ストレングス）を伸ばし、且つそれを地域に活かし還元していく。

＜期待する成果＞ 地域と施設の垣根が取り払われ、地域の一員としての気持ちが芽生えと同時に、地域住民の利用者へ対する理解が深まる。

このことから、地域住民との交流がさらに活発となり、利用者の活動範囲がさらに広がり、生きがいの拡大に結び付く。

《3. 具体的な取り組みの内容》

平成21年7月から実施している、昭島市のアダプト制度を活用した、利用者による公園の清掃活動“キレイあきしま”を通して、利用者から『地域にもっと貢献したい』との声上がり、これがきっかけとなり次の活動に取り組んだ。

①近隣の小学校の芝生の手入れ活動

地域住民より苦情が出たため、小学校の校庭を借りてゲートボール活動をすることになった。

そのお返しとして、学校の芝生化事業を支援し、東京芝生応援団員として利用者数名が芝生を手入れしている。毎週 1 回実施。

②近隣の小学校児童と互いに教え学び合う活動

学校の教育方針に沿って、毎月の交流プログラムを作成し、偕（とも）に行う公園清掃や児童による学習発表会の披露、利用者が講師となるゲートボール教室等交流を図った。毎月 1・2 回実施。

③近隣の保育園への訪問

希望者を募り職員と保育園に出向き、園児と交流を図った。2 ヶ月に 1 回実施。

④寺院清掃

亡くなられた利用者の墓地があるお寺の庭掃除を実施。年 2 回。

⑤盆栽同好会による地域住民への訪問

同じ趣味を持つ地域住民宅を訪問し、親睦を深めた。2 ヶ月に 1 回実施。

⑥住民参加型スポーツイベントへの参加

地域住民と直接的な交流ではないが、市民としてスポーツイベント(チャリッヂ - 2012)に参加。

《4. 取り組みの結果と考察》

①近隣の小学校の芝生の手入れ活動

芝生の手入れ活動がきっかけで小学校の児童との交流が始まり、児童の展覧会に呼ばれ、互いに教え合う交流にまで発展していった。

②近隣の小学校児童と互いに教え学び合う活動

利用者が先生となり、児童に昔遊びやゲートボールを教えるなど、同じ児童との交流を継続することで、お互いに身近な存在となった。利用者は子どもに感心を持ち、児童には高齢者を労わる気持ちが芽生えた。児童と父兄へのアンケートから、児童の高齢者に対する気持ちの変化や、父兄からは活動への評価が確認できた。

③近隣の保育園への訪問

保育園にこちらから訪問する事で、普段と変わらない、生き活きた園児と交流する事ができた。また回を重ねるごとに『また園児に会いに保育園へ行きたい』気持ちになった。

④寺院清掃

法要や葬儀でお世話になっている住職より感謝の言葉を頂き、地域に役立つ実感を得た。

⑤盆栽同好会による地域への訪問

親睦を深める事で、地域住民から盆栽の知識を学ぶ事ができた。

⑥住民参加型スポーツイベントへの参加

昭島市民の一員として、利用者同士お互いに助け合いながら身体を動かす事ができた。

以上の結果から、地域との交流が活発となり、地域住民の利用者へ対する理解が深められた事を確認できた。特に父兄からの理解は予期せぬものであり、アンケートからも利用者の力が地域の役に立つのだと大きな実感を得る事ができた。

《5. まとめ、結論》

入所されると閉鎖的な生活環境になりがちであるが、養護老人ホームの特性を活かして地域に出向いた交流をする事によって、私達が気づかなかった利用者の、地域に貢献したい気持ちが見えてきた。今後は地域交流を継続発展させ、児童が放課後、園に遊びに来られるような、地域と身近な施設でありたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 提案と発信》

現在、地域から孤立した状態で暮らしている高齢者の孤独死などの問題から、「地域の見守りネットワーク」を進める自治体が増えている。しかし、様々な要因から生活問題が重層化している高齢者＝「困難事例」に対応する専門機関である地域包括支援センターにおいても、経験や知識が不足していると言われている。ケースワークの現場とも言える、養護老人ホームの持つスキルを地域に還元することも、地域交流を介してできることのひとつと考える。これからも利用者・職員、そして地域と偕に生きていけるようチャレンジしていきたい。